

Title	安澤秀一著 近世村落形成の基礎構造
Sub Title	Shuichi Yasuzawa, The formation of village community in Tokugawa Japan
Author	速水, 融
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1972
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.65, No.7 (1972. 7) ,p.493(43)- 495(45)
JaLC DOI	10.14991/001.19720701-0043
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19720701-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

労使関係の状況について、何を教えるのであろうか。考えられることは、まず第1に、制限的労働慣行の廃止を意図するはげしい合理化攻勢であり、労働組合の craft union の政策としての抵抗の姿勢である。第2にそうした合理化攻勢にたいして、労働組合幹部もなお規制しえない unofficial strike の問題がある。第3に、以上の2つの問題から、当然つぎのような重大

な問題がおこってくる。すなわちイギリス労働組合運動の機構、つまり労使関係の方式のあり方である。そしてつぎに幹部不信の問題である。これらについて更に深く考察するためには、こうした unofficial strike の原因を追求する必要がある(未完)。

(経済学部教授)

書 評

安澤秀一著

『近世村落形成の基礎構造』

本書は、安澤秀一桃山学院大学教授が、昭和30年から10年間に亘って発表された論稿の内、南武多摩丘陵に位置する村々に関する史料を素材として、村落形成の過程とその構造について論及された8編の論文を集成されたものである。しかし、その内3編については殆んど原型をとどめない程修正され、他についても補筆訂正が行なわれている。著者安澤氏は、昭和25年、本塾卒業後、文部省史料館にしばらく勤務された後、昭和36年より上掲の学院に勤められている。

本書の構成は以下の如くである。

序論 近世村落の機能分析

前編 南武多摩丘陵村落の生活構造

第1章 南武多摩丘陵村落の農業条件

第2章 領主支配の形態と年貢賦課の様相

第3章 村落社会の構造とその機能

第4章 近世村落の変貌

第5章 幕末期農業経営の収支計算例

後編 近世村落形成の機構分析

第6章 領主支配と近世村落

第7章 近世前期の新開と入会野

第8章 入会野分割における領主と村と百姓

第9章 年貢の賦課・収納と近世村落

第10章 年貢負担者と近世村落

第11章 農業経営承継の諸形態

第12章 農業経営自立の経済的条件

引用史料所蔵者一覧・引用史料表題索引・事項索引

まず、ごく簡単にその内容を順を追って紹介しよう。序論では著者の分析視角が述べられて居り、徳川幕藩体制の成立という条件の下で、近世的村落秩序の形成とその機能を考察する場合、いかなる分析用具が用いられるべきかが展開されている。後に述べる如く、それは、「行政村落」と「生活村落」という作業仮説であり、両者の交錯・複合も含めて、接近への手段として設定されている。

前編では、当該地方全域に跨る考察で、徳川時代の初期から幕末期近くに至る間の村落形成およびその構

成員である農民の経営分析を試みられている。第1章は、この地域全体に亘り、農業経営を支える条件として、耕地の構成、田畑比率、水利条件、作物種類および農法等について「武蔵田園簿」や各村の村明細帳等から観察されている。結論的には、複雑な地形を有するこの地域なるが故に、そこに多様性を見出しつつも、水田耕作においても、購入肥料の導入においても、後進地帯としての性格を拭いえなかったことが指摘されている。第2章では、幕藩体制の成立に伴い、特に江戸城下からさほど遠くはないこの地域の所領支配と年貢賦課の特色が述べられている。所領関係では、天領と旗本領の錯綜、相給からもたらされる領主支配の分断的性格、知方永納制による実質年貢負担率の相対的低位性が結論として導き出されている。

第3章は村落内部の分析に入り、耕地保有(持高)に基く農民の階層構成を近世初期については主として各村の検地帳、中期については、宗門人別帳等から明らかにし、且つ村落生活の様相と題する節では近世初期にしばしば見出される野論・村境論争を題材として、近世本百姓創出の過程を明らかにされている。第4章は、前章で取扱った以降の時期において、一たん成立した近世村落の秩序が、特に貨幣経済との接触を通じてどのように変化して行ったのかを追求するものである。持高別分布については明らかに零細持高層の比率が増大しているのが看取されるが、さらに宗門改帳による年齢別構成の観察を行うことにより、出稼による男子壮年層の相対的な薄さを提示されている。また、村明細帳類を用いて各村の特産物等を明らかにし、最後に、近世後半における領主(特に旗本)財政の悪化に伴う領主支配の変貌を追求し、逆に被支配者たる農民、就中名主層の活動を明らかにされている。第5章は旧武蔵国都筑郡山田村に見出された「沢田栄昌具申書」(著者による仮題)に基き、幕末期の農業経営の標本的事例を紹介されたものである。

後編は、前編で取扱った各村落の内、特に良質の史料を有する多摩郡連光寺村を主とし、これと同郡野津田村の史料を補い、村落を単位とした近世村落形成の過程と構造分析を行うものである。

第6章から第10章に至る約320ページは、著者の精力的なこの地方に対する史料探索の最大の成果である。旧連光寺村富沢家文書(現文部省史料館蔵)を駆使した近世村落形成とその秩序の解明であり、本書の基核をなすものである。土地利用に関しては新開と入会、年貢の収納賦課、年貢負担者の存在形態という三つの局

面が接近への足場として設定されている。初期においては、多数の隷属的労働力を有するこの地の土豪的農民家族が、新田開発を楨杵としつつ、家族労働力依存の小経営に分解自立して行く過程が実証史料によって跡づけられている。そして、このような近世的生産力発展が、開発地の不足、労働力転換の完成、技術水準の固定化によって壁につき当るようになると、(ほぼ17世紀末葉の頃)村落の共同体的秩序が固定=成文化し、特にそれは原野・山林の用益をめぐって表面化した。このような事態に至る以前においては、「そうした秩序は……可変的な形成過程をもっていたであろう。」

上述の如き秩序の固定化は、教カ村入会地の用益についても生ずる。しかもこの場合は領主権との関係が生じ、さらに領主が旗本であることから、上級領主としての幕府権力との関係が出て来る。結論的には教カ村入会形態は分割され、その間に領主(旗本)の土地に対する権利の縮小化が絡み、農民による土地所有権の強化という方向が打ち出されるのである。

また、近世社会を特徴づける石高制が村落においていかに受けとめられたかに関しては、初期の年貢収納台帳の成立を通じて考察が行われている。そして、石高で表示された年貢納付が、実は「八王子時相場」によって貨幣納であることをつきとめ、年貢収納と「市場経済」との関連を指摘する。そしてこの年貢収納が村の内部でいかに割りふられるのかという点に関しては、興味深い以下の諸事実が明らかとなった。まず、この関係の史料が出揃うのは、17世紀中葉の頃であるが、あたかもその時期は、小経営の分出独立期に当り、新田開発も進行中であった。従って農民と土地保有の関係は、複雑な性格を有するものとなっている。近代的所有権とは違って、所有の権限が層状をなし、年貢負担の責任は単純には確定しえない。これに加えて幕府の法令として分地制限令の影響があり「公的」負担者と「事実上の負担者」との乖離が生ずるのである。

第11章および第12章は、主として血縁家族の分家という形態をとる小経営の成立過程を、連光寺・野津田両村の事例を通じて明確にしようとしたものである。相続乃至は分家の場合、財産としての土地は如何に継承又は配分されるのかは一概には云えず、また二つの村の間でも対照的であるが、分家の場合、結局は不平等分割であり、「分立するそれぞれの経営にとって、合理的となるように個別・特殊的な現実の力が強く働いた」とされている。

さて、全編を通じて著者が解明しようとしたのは、近世村落の形成が、いかなる要素から成り、いかなる条件の下で、いかなる局面をもって構成されていたかという点にある。何が中世の村落又は近代の村落と近世村落を区別しうるモメントになるのかと云えば、それは近世村落が「行政村落」としての面と、「生活村落」としての面を併有し、相互関連的な性格が貫かれているとみるのである。「行政村落」とは、この場合、領主=農民間の縦の関係から設定された村落で、年貢諸役の賦課収納を主軸とし、実現されるその量を最大ならしめんとする領主側の意図と、最少ならしめんとする農民の対抗を一つの緊張関係として構成されるものである。一方「生活村落」とは、村民が農業生活を維持して行く上で、現実的に必要となる一つの共同生活体、すなわち村落構成員の(必ずしも平等ではない)横の結合である。

近世の村落構成員は、その小経営を維持させるべく、共同体の成員となり、相互に補完し合わねばならなかったことが、入会地利用・水利慣行という農業成立の基礎的条件の場であらわれている。この場合、著者は小経営の生産力水準、自給部分と非自給部分の比率、労働力の供給と労働用具の組み合わせ、土地保有といった生産力実現の具体的側面を観察すると同時に、生産された物財が、いかに自家消費部分と、経営外搬出分(年貢諸役+販売)に分割されるかという、生産物の処理面の観察を併せ行っていることが注目される。

この最後の問題に関連して、近世の農民が、いかに市場と接触をしたかに関し、著者は、全面的依存とは程遠いものであったことを裏付けている。従って個々の小経営は、市場との関係によってのみその存立を支えられているというよりは、小経営相互間の結合関係を色濃く残すものであった。

著者による一つの重要な指摘は、「行政村落」と「生活村落」の複合関係で、これは近世の年貢賦課が村請制を通じて実行されるものであり、他のどの時代の村落よりも、農民生活と村落は密着したものであった。また、戦後、太閤検地論争・寄生地主制論争等が華々しく展開されながら、その間にドロップして行った重要な問題——近世農民の現実の生活構造の解明は、基礎的研究への足掛りとして、貴重な成果をもたらすこととなった。

著者が本書で利用した農村史料は、その殆んどすべてが長年に亘る著者自身の史料調査の結果賜の目をみたものであり、かなりの範囲に亘る一つの地域史研究

のモデルとしての価値も高い。しかも集積された歴大な史料群を一つ一つ周到な史料批判の手續を経て操作を行い、観察および検証の素材とされている。この手堅さは本書の持つ説得力の重要な部分を占めるものである。

本書に対する批判を若干述べるならば凡そ以下の如くであろう。まず全体としての構成がやや冗漫に失し、論述の重複する箇所が散見される。

また史料の全文引用がかなり多い。これは、近世史料の印刷刊行が甚だ不十分な現況では、已むを得ないことであり、著者の責任ではないが、本来ならば史料は史料集として別箇に刊行されることが希ましいのである。読者にとっては、研究書に多くの史料が挿入されていることは、特に著者によるその解釈が附されていない場合には、史実の観察にせよ、仮説の検証にせよ、著者の意図とは異なる判断を下してしまう可能性が十分ある。史料編纂の仕事と歴史研究の仕事は、不可分のものであるとはいえ、必要な分業体制が確立していないこの国の特殊事情が然らしむるのだろうか。

内容的には、次の二つの点についての著者の考慮を明確に示すべきであろう。一つは小農自立のモメントの問題である。通常これは、幕藩制成立における領主の意図から説明されている。すなわち全余剰搾取形態の実現であるとする。しかし著者はこのような立場には必ずしも立っていないように見ることが出来る。勿論それが領主の意図としてあったことは認められるのであるが、具体的な自立の政策の手段については触れられていない。然らば何故、近世初頭のあの時期に小農自立が進行したのであるか。二番目の問題としては、第一の場合と関連するのであるが、農民と市場経済とのかわり合いである。小農自立はこのことと関係なく進行しえたのであろうか? 年貢、特に畑方年貢の貨幣納という事実は、農民をして強制的に市場経済との関係を創出させるであろう。そうでなければ、貨幣を持つ誰かとの関係を生じたに違いない。にも拘らず、著者は農民の「自給的要素」を一方ではかなり強固なものとして扱っているように見受けられる。この矛盾をどのように説明すればよいのだろうか。市場と接触する農民は、決して農民層一般ではなかったのかもしれない。しかしそれならば、市場と接触した農民と、接触しなかった農民との間には如何なる関係が生じたのだろうか?

また、著者が折角設定した「生活村落」概念をさら

に一步突込んで、農民の持つ生産技術やその変化、たとえば家畜所有の階層別構成、それと新開との関係、労働集約度の測定、これらの局面と村落との関係といった点に立ち入ることができたならば、たとえそれが一地域・一村落の事例であったとしても、貢献はさらに大きなものとなったに違いないのである。

ともあれ、本書は比較的、質・量ともに揃った村方史料を駆使し、従来薄もやに包まれていた感のある近世初期関東農村の輪廓をはっきり提示することに成功した業績と云えるだろう。このような緻密な研究が、各地で多数行われることによるのみ、問題の多い近世初期の農村・農民の歴史を解明することが可能なのである。

(吉川弘文館、1972年刊、A5、728頁+附図および各種索引、定価6,300円)

速水 融
(経済学部教授)

安田三郎著

『社会移動の研究』

本書は、日本における統計的研究法による実証的社会学上の「1つの典型・道標」たらんとし書かれた、実に雄大な構想をもった労作である。

社会移動研究の思想的系譜、社会移動の概念論および測定論、国際比較を含む社会移動の構造、社会移動意識の分析、日本におけるそれにかんする歴史記述、社会移動が社会的態度に及ぼす影響、さらに研究史までも収めた、この大部の著作の内容を逐一紹介することはこのスペースではとてもできない。しかも、社会学についてはまったくの門外漢にすぎない者がこのような著作を真正面から論評することなど、到底不可能なことである。したがって以下の紹介・感想も、一経済史研究者にとって興味深く感じ、また教示をうけた部分についてのみ、記したにすぎない。そういう意味でまったく「変則的」な書評であることを予めお断りし、また著者の御寛容を乞いたい。

「社会移動とは、個人の社会的地位の移動である」(1.2.7)というのが著者の定義である。この非常に簡潔な定義もP. Sorokinのそれに批判的検討を加えた結